氏 名 （ 本 籍 ）	坂本　暁彦　（　茨城県　）
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　6768　号
学位授与年月日	平成２６年　３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	A Theory of Labeling in the Minimalist Program: Valuation in Merge and Its Application. （極小主義プログラムにおけるラベル付けの理論：併合時の値付与とその適用）

主　　査	筑波大学教　授	博士（言語学）	加　賀　信　広
副　　査	筑波大学教　授	文学博士	廣　瀬　幸　生
副　　査	筑波大学教　授	Ph. D.（言語学）	竹　沢　幸　一
副　　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	島　田　雅　晴
副　　査	茨城大学教　授	Ph. D.（言語学）	西　山　國　雄

論　文　の　要　旨

チョムスキーをはじめとする生成統語論の研究者たちは、人間に固有な言語機能の解明を目指して、分析・綜合といった自然科学的手法を用いながら研究を進めてきた。その中で、とりわけ句構造の分野において、幾度かのパラダイム・シフトとも呼べる理論的発展があった。標準理論（Chomsky 1965）は、句構造規則と変形規則の複合的な規則の体系を作り上げることで、離散無限性・内心性・順序関係といった言語の根本的諸特性を捉えようとした。しかし、規則に基づく体系は構文特有の規則をいくつも認める点で非常に複雑なものであり、個別言語の観察を通して記述的に妥当な理論の構築のみを目指すものであった。記述的妥当性をもつ理論構築に見通しがつくと、今度はその説明的妥当性を問う段階へと進むことになった。原理とパラメータのアプローチ（Chomsky 1981 など）の下では、句構造規則を抽象化した X バー理論が進化を遂げ、離散無限性は X バー式型の反復適用から、内心性は主要部 X の投射から、順序関係は主要部パラメータから派生されるという具合に、言語の諸特性が X バー理論から統一的な形で導かれることが示された。このように言語機能の理論が簡素化されることで、言語獲得の問題に向かう糸口がつかめただけでなく、言語間の変異も取り扱えるようになった。

さらに、超説明的妥当性を目指す極小主義プログラム（Chomsky 1995）では、よりシンプルな理論を追究する努力がなされ、併合（Merge）というきわめて単純な演算操作が採用されることになった。併合とは、二つの統語対象（Syntactic Object）を結合させるという純粋な集合形成操作である。構造構築演算がこのような単純な操作として再定式化されたことにより、言語の発生や進化についての問題に接近しやすくなっただけでなく、X バー式型を含め D 構造や S 構造のような概念的必然性のない数多くの人工物が排除されることになった。併合の理論では、離散無限性が併合の反復適用として捉え直されるが、一方で併合の適用は投射の適用を含意しないため、内心性を捉えるためには別の仕組みが必要となる。Chomsky (2013) は、その仕組みとして、ラベル付けアルゴリズム（labeling algorithm）を提案した。その提案によれば、併合によって定義された集合 SO = {H, XP} のラベルは主要部（head）によって決められる。すなわち、統語対

象 SO から主要部 H を検出し、その特性によってその集合を名付けるという操作である。

本論文は、併合とラベル付けの連携が構造構築演算の中枢であるとの認識に立った上で、内心性を捉えるための仕組みとして、Chomsky (2013) のラベル付けアルゴリズムに代わる操作を提案する。すなわち「併合時の値付与」である。この操作は、併合により新たな統語対象が形成される際に、語彙項目の卓越的な素性が主要部の端素性（edge feature）に一定の値を付与することで、新たな統語対象の意味解釈特性が同定されるというものである。同定される意味解釈特性は、その後、概念・意図インターフェイスを通して意味部門に送られて、そこでの文解釈に貢献するという意味で、独立の動機づけを有する理論物である。したがって、この併合時の値付与の仕組みを採用すれば、Chomsky のラベル付けのアルゴリズムを用いることなく、その効果を派生的に導くことができることになる。本論文ではさらに、併合時の値付与の仕組みを英語の空移動現象および寄生空所構文の分析に適用することで、新たな優れた分析が可能になることを示す。

本論文は 7 章で構成される。

第 1 章では、生成統語論研究が扱うべき対象や目標が示された後に、本論文の目的と構成が述べられる。

第 2 章では、近年の研究（Chomsky 2000 以降, Richards 2007, Narita 2011 など）を基に、併合や一致、値、ラベル付け、転送、素性継承などの、極小主義プログラムにおける基本概念を導入する。

第 3 章では、併合時の値付与についての理論を提案する。Chomsky (2008) によれば、語彙項目は一致素性と端素性という二種類の素性をもちうる。一致素性は T や V のような非位相主要部の特性として素性付与を引き起こす。一方、端素性は語彙項目の特性として併合を駆動する。一致素性も端素性も解釈不可能素性であるが、前者の値付与の体系が原理だった形で定式化されているのに対して、後者の値付与の体系はこれまで十分な定式化がなされてこなかった。本章では、端素性が併合時に値付与されるという操作を提案する。併合に基づく値付与を通して新たに形成される統語対象の意味解釈特性が決定され、それがインターフェイスでの解釈に貢献することになる。

第 4 章では、値付与理論が Chomsky (2013) のラベル付けアルゴリズムの効果を派生することを論じる。さらに、この理論が Cheng (1997) によって提案された節タイプ表示（clausal typing）の仕組みの位相理論的な発展版として位置づけられることを指摘した上で、この理論の節構造・述語構造における具体的適用を示す。

第 5 章では、いわゆる空移動現象が値付与理論と素性継承の相互作用から説明できることを示す。従来、移動の空適用に係わる現象は「音声形式出力に影響を及ぼさない移動は取り消すことができる」とする空移動仮説によって説明されてきた（George 1980, Chomsky 1986, Agbayani 2006 など）。しかし、素性継承の仕組みを組み込んだ値付与理論を採る本論文の分析の下では、空移動仮説は不要なものになり、これまで空移動仮説の分析で捉えるのが難しかったいくつかの経験的事実が適切な説明を与えられることが示される。

第 6 章では、値付与理論の下で、英語寄生空所構文の新しい分析が可能になることが示される。具体的には、寄生空所を含む付加詞節が Chomsky (2004) によって提案された「後付け（afterthought）」と呼ばれる操作を介して導入される制限的関係節として特定されるというものである。また、ここで提案された分析は、Sakamoto (2011) が提案した平行性条件と連動することにより、核文法の側面とより表層的な側面との間に見られるある種の違いを的確に捉えられるようになることが述べられる。

第 7 章では、本論文の主張がまとめられ、結論と今後の展望が述べられる。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、最新の極小主義プログラムの考え方の下で、統語構造の構築の問題を追究し、併合時の値付与という独自の仕組みを提案している。この仕組みは、Chomsky (2013) のラベル付けアルゴリズムの代替案として提示されたものであるが、この仕組みを導入することにより、簡素化された統語対象形成の手順が保証されるだけでなく、形成される統語対象の意味解釈特性が同定されるため、この操作は同時に意味部門における文解釈にも貢献するという効果を持ち併せている。その意味で、本論文で提案された値付与の仕組みは、極小主義プログラムにおける統語論研究に新たな一面を付け加え、さらなる発展を駆動する可能性を有している。この点は、まず高く評価されるべきである。

また、本論文は、値付与の理論に素性継承の仕組みを組み込むことで、従来の研究で解決が難しかった空移動現象に関わるいくつかの問題および関連する現象に対して、原理的な説明を与えることに成功している。さらに、英語の寄生空所構文に対しては、Chomsky (2004) の「後付け」の考え方を援用することで、従来の分析を超える、より体系的な説明が可能となった。いずれも先行研究の批判的検討と経験的事実に関する精緻な議論を伴っており、英語の構文研究に多大な貢献をなすものと評価することができる。

以上のように、本論文は統語構造の構築の問題に関して独自の優れた提案を行い、また、英語の特定の構文に対して新たな分析を提示しているが、さらに付け加えて言えば、本論文は、1950 年代からの生成文法の理論的発展をしっかり踏まえ、とりわけ、句構造規則から X バー理論に進み、さらに極小主義プログラムにおいて併合の操作が採用された意味合いを適切に理解した上で、理論的考察を行っている点に優秀さが認められる。最新の理論的展開だけに目を奪われるのではなく、長期的な見通しに立った上での確かな議論が展開されており、統語論研究に対する真の意味での貢献が期待できると考えられる。

ただし、本論文に今後に残された課題がないわけではない。提案された値付与の仕組みが Chomsky (2013) のラベル付けアルゴリズムに代わるものであるとしたときに、アルゴリズムが捉えようとした主要部投射の考え方が完全に不要であるのか、別の言い方をすれば、併合の操作が生み出すのは本当の意味で対称的（symmetric）な構築物であるのか、という問いにまず答えなければならない。また、空移動現象の議論に関わる主要部合体（amalgamation）の統語的タイミングの問題や、寄生空所構文の分析における外部主要部名詞と制限的関係節の関係が叙述（predication）でよいのかという問題など、さらに詰めて考えるべきことが残されている。もちろんこれは、今後の課題として取り組むべきことであり、本論文の価値を何ら損なうものではない。

2　最終試験

平成 26 年 1 月 24 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。